様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１８４７７

研究課題名（和文）戦後日本の女性メディアにおける「パリジェンヌ幻想」の歴史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study of the "Parisienne Fantasy" in Postwar Japanese Women's Media

研究代表者
猪俣　紀子（inomata, noriko）

茨城大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：２０７３４４８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：現在日本の女性メディアにおいてみられる「パリジェンヌ幻想」について、それがどのように形成されたのかを、歴史社会学的に分析した。明治、大正期において男性作家によって描写さていたパリジェンヌイメージ形成の担い手が女性へ受け渡されたのは戦後であった。それには、近年ファッション史において位置づけられるようになった洋裁文化の存在が大きな役割を果たしていたことがわかった。パリモードを頂点とする洋裁学校に通う女性たちは、高価で買うことのできないパリモードを、自分たちの体型に沿うよう翻案しながら衣服を制作した。女性たちはミシンを踏みながらパリジェンヌへの憧れを身体化させていったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで日仏文化移入は文学や芸術分野の男性作家がいかなるパリ憧憬を抱き、作品に反映されてきたかを語ることに終始していた。本研究ではこれまで行われてきた文学的アプローチに欠けていた大衆文化と女性の視点を導入したことに学術的意義がある。女性のパリ文化移入の歴史的研究として、今日の女性メディアにおける理想の女性像を投影したかのようなポジティブなパリジェンヌ幻想形成の歴史を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a historical sociological analysis of how the "Parisienne fantasy" currently seen in Japanese women's media was formed. It was only after World War II that the image of Parisienne, which had been portrayed by male writers in the Meiji and Taisho periods, was passed on to women. It was found that the Western-style dressmaking culture, which has recently been positioned in the history of fashion, played a major role in this. Women who attended Western-style dressmaking schools, with Paris mode at the top of their list, created clothes by adapting the expensive and inexpensive Paris mode to fit their own body shapes. It became clear that the women embodied their admiration for Parisienne as they stepped to the sewing machine.

研究分野：マンガ研究

キーワード：パリジェンヌ　文化移入

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１。研究開始当初の背景
近代におけるフランス文化の日本への移入も 100 年が過ぎ、フランス文化移入や日仏交流についての研究はこれまで盛んに行われてきた。しかし、従来の研究は文学者や芸術家などいわゆるハイアートの分野の男性作家がいかなる「パリ憧憬」を抱き、いかにフランス文化から影響を受け、自らの作品に反映させたのかを語ることに終始してきたといってよい。つまり、研究対象とされるほぼすべての言説は男性によって構成されたもので、それを文学的アプローチで研究されるのが常であり、大衆メディアの研究と女性の視点が欠けていることは明らかである。
明治、大正期の男性作家が描く「パリジェンヌ（巴里女、巴里娘）」は明らかに娼婦であった。この男性のまなざしのもとにあったネガティブなパリジェンヌ像が、いかにして現在の女性メディアにおけるポジティブなパリジェンヌ表象へと受け渡されたのか。女性のパリ文化移入の歴史的研究がない現在、この「幻想」の歴史を辿ることは困難となっている背景がある。

２。研究の目的
本研究では女性のパリ文化移入の歴史的研究として「パリジェンヌ幻想」に注目した。パリジェンヌとは、パリに暮らす女性を意味するが、単に在住地と性別を示す言葉としてではなく、特別なイメージを持って使用されている。とくに戦後日本の女性向けのメディアにおいては、パリジェンヌのライフスタイル、ファッション等に関する称賛と憧れの言説を頻繁に目にすることができる。日本女性が未だにパリジェンヌに憧れがあることは明らかであるが、そうした憧れはいかにして形成されたのだろうか。女性向け大衆メディアの研究を行い、今日に至るパリジェンヌ幻想がいかにして形成されたのかを明らかにすることが目的である。

３。研究の方法
以下の 6 つの時代区分にわけて文献調査、フィールドワーク、インタビュー調査を行った。
(1)明治・大正期の男性作家（芸術家など）による「パリ女」像の研究
(2)大戦間期の女性メディアにおけるパリジェンヌ像の研究
(3)終戦直後の女性メディアおよび女性たちのパリジェンヌ像の研究
(4)戦後女性の「パリジェンヌ幻想」の形成期の研究
(5)1980 年代以降の「パリジェンヌ・ブランド」形成期の研究
(6)「パリジェンヌ」イメージの「ライフスタイル」化と構築の研究
国内諸機関（国会図書館等）における資料収集と女性による著作物の文献表作成
フランス国立図書館で文献調査、フィールドワーク、インタビュー調査
国内諸機関（大宅壮一文庫等）における女性雑誌調査と文献一覧作成

４。研究成果
(1)1910 年以降から戦後のフランス、パリジェンヌイメージ
　1910～20 年代はパリジェンヌが男性作家によって語られていた。そのなかでパリジェンヌが性的対象の「娼婦」のような存在として評されているものが多くみつかった。以下例を挙げる。永井荷風の『ふらんす物語』（博文館、1909 年）では、「巴里の女は決して年を取らないと云うけれど、実際だと自分は思った」「男は万事を忘れてその方へ引き付けられるように感ずる」という記述がみられる。依田碧浪の『倫敦巴里魔窟の真相』（神田書房、1913 年）では、「中流階級の半娼売的の女には三つの異なった型が含まれている」とし、「カルチエの女」「モンマルトルの女」「グラン・ブルバールの女」を挙げ「素人淫売」だとする。林田亀太郎の『カッフェー夜話』（北村書店、1914 年）では、「巴里は女の本場である」、「巴里美人は花柳の精である」とある。ここからは、パリジェンヌが娼婦のような仕事をしていたことがわかる。
　また、小説家菊池幽芳の「幽芳集」（至誠堂書店、1915 年）では以下の様に述べられている。「横から見ても縦から見てもまぎれもない巴里婦人（パリージエヌ）である」、「私は女の話す言葉として仏蘭西語ほど人を恍惚（ほれぼれ）させるものはないと始めてさう思った。」「美しい若い巴里婦人（パリージエヌ）同士が鳥の囀づるように喋下つているのを聞くと、メロジーに引入れられるように恍惚となる。女の言葉としては如何にも女性的な、そして同時に音楽的ないい言葉だ」、「全く西洋人の標準は裸体本位だから、父の張った尻の大きい肉附きのいい女でないと全く美人に数へない。礼装（デコルテ）かなにかを着て、薄い絹を纏った女をオペラの廊（ガレリー）かなにかで見ると、すっかり身体の輪郭が描かれて、強烈な肉の香を感ぜしめる。挑発的な女でなければ男女生存の競争原理に堪へて行けないのだ。」とある。ここでは、1915(大正 4)年

に、「巴里婦人（パリージエヌ）」という現在の「パリジェンヌ」にあたる単語が出てきていることにも注目したい。
松尾邦之助『巴里』（新時代社、1929 年）からはセンセーショナルな表現がみられた。『“巴里女”と云ふて第一に連想する女は、所謂ミディネットと云ふ種類の女だ。」「貧乏だが、洒落てゐる」可愛い。コケットな女だ。」「そして快惰だ。いつも愛撫する男を持ってゐる。」『“巴里女程軽薄極まる女はない。巴里女の顔は全部淫売婦の相がある。性欲の対象としての美以外に、彼女等は何物も持って居らぬ。“これはフランス人がフランス人に与えた非難だ。」、「巴里女は花の如く眺め、猫の如く愛してやれば、それでいい。」ここではパリジェンヌが性的な対象でしかないものとみられている。パリジェンヌイメージが現在と大きく異なるものだったことがわかる。
その後、30 年代、40 年代になると男女の作家による、モードに焦点を当てたおしゃれなパリジェンヌが語られるようになった。10～20 年代の戦前の男性が語る「娼婦」としての巴里女・巴里娘から徐々に「憧れとしての存在」に変化し始め、戦後すぐあたりから、パリイメージ、パリジェンヌイメージの女性との共有が始まっていたといえる。30 年代以降のパリジェンヌから、現代のパリジェンヌにつながるイメージが形成されてきたことがわかった。

(2)戦後のパリジェンヌイメージ
戦後、日本にフランスブームが訪れ、1950 年には朝吹登水子が再度渡仏し、洋裁学校へ通う。1951 年には女優の高峰秀子が 6 か月の間ではあるが渡仏し、『巴里ひとりある記』（映画世界社、1953 年）を記す。そのほかにもシャンソン歌手の石井好子も渡仏し、パリで親戚の朝吹と同居した。小説家の平林たい子も『小説新潮』に「パリ女の魅力」（新潮社、1952 年 10 月）を、フランスの帰国子女で外務省情報文化局事務官を務めた田付辰子が『パリの甃』（読売新聞社、1955 年）を記している。そのほか、中原淳一は 51 年に渡仏し、自ら創刊した婦人雑誌『それいゆ』や少女雑誌『ひまわり』で「パリ特集」を企画している。在仏の画家高野三三男は「各々がその分に応じて妍を競う調和の美は驚愕に値する。」、「今日昨日にわか仕込の銀座趣味では生まれてこない美の世界である。」とモードに関してパリジェンヌの類まれなセンスを激賞している。男性による記事であるが、女性誌に掲載され、話題はモードに終始ししている。このような特集は現代の女性誌のパリ特集と扱われている項目が共通している。50 年初頭から現在の女性誌での特集の形式がつながっているといえるのではないか。
女性によるフランス文化移入が行われるようになったきっかけを調査するうち、近年ファッション史において位置づけられるようになった洋裁文化が浮かび上がった。日本で特殊に発達した洋裁文化について資料より検証した。戦後、女性の洋装化が一気に進み、1955 年には洋装が 94%という調査結果が出ている。しかし洋装は高価であったこともあり、購入ではなく自家裁縫されていた。1960 年代以降徐々に自家裁縫から離れていくまで、洋装は現在のように既製品を購入するのではなく、女性たちが洋裁をして自分たちの手で製作したもので成り立っていた。洋装啓蒙期である大正末期から洋服は高価で、家庭洋裁の知識は不可欠であった。この自分たちで製作する、という行為が欧米と比較して特殊な日本の洋装文化を作ったといわれている。全国で興った洋装学校において、このマニアックともいえるまでの高度な技術を、多くの一般女性たちが学んでいた。先行研究では、洋裁学校から社会に送り出された卒業生はほぼ 1000 万人であり、ほかの分野の専門学校とは同一視できない、巨大な集団が存在したことが指摘されている。
この巨大な文化産業の指導者(デザイナー）が、目指していたモードはアメリカのものではなく、自らを他と差異化し、権威づける意味合いもあった「パリ・モード」であった。洋装とは洋風の衣服を意味し、洋装がフランスの衣服を着用することではない。しかし、実際は洋装が、パリ・モードを目指し、それをいかに日本人の体の上に翻訳するかに苦心していた。
1952 年 4 月 2 日の朝日新聞の洋装熱を伝える記事「まだ盛んな洋装熱」では、「パリのモードを全世界のデザイナーが盗みに行くという話を聞いている」とある。戦後 GHQ の統治下にあり、アメリカの洋服に実際に触れる機会がありそれを基に製作もされていたが、目指すべき洋装の頂点としてはパリ・モードであったことがわかる。確かに、戦後、アメリカ兵やその家族が持ち込んだアメリカの通販用のオーダーブックとよばれる媒体で、洋装店は洋装の型紙を学び、パンパンたちが実際に取り寄せていたことは資料より確認できるが、アメリカではなくフランス、パリというのが、パンパンなど街中の流行とは異なり、洋装学校・デザイナーの権威を担保してもいたのだろう。デザイナーたちの、自分たちの立場をほかと差異化・正統化したい思惑のために、「パリ」が意識的に、積極的に利用されていた一面があったことがわかる。このパリ・モードを頂点とする洋裁文化が、洋裁学校を通して、若い女性たちにパリを憧れの地として刷り込んでいったことは想像に難くない。高価なパリの服飾品を買うことはできない庶民の生徒たちが、パリのモード、それを着こなすパリジェンヌを想像しながら、自分たちの体の上に再現するため、型紙をひき、ミシンを踏む。長時間かけて作ったパリ風の衣服を着用し、彼女らはフランスへの憧れを自分のなかに取り込んでいった。この洋裁文化とともに「パリ」、「パリジェンヌ」イメージも女性文化のなかで大衆化されたと考える。

以上から、明治・大正・戦前期には男性主体で語られていたパリジェンヌ言説が、主体、内容ともに大きく変容していく転換点が明らかとなった。

(3) 70 年代から現代のパリジェンヌイメージ

既製服の台頭が始まり、50 年代の終わりから洋装文化にも終焉の兆候が出てくるのに伴い、洋装文化、洋装学校とともにあった、女性雑誌にも変革が起こる。70 年には『an・an』（現マガジンハウス）が、翌年には『non・no』（集英社）が創刊され、これらは 70 年代半ばまでにはビジュアル・ファッション誌と呼ばれ、その様式を確立していく。

その後の女性誌に大きな影響を与えた両誌であるが、それまでの女性誌のような、パリ・モード伝播の伝統も受け継いでいた。『an・an』はフランスのファッション誌『ELLE』の日本語版として創刊されたこともあるが、例えば 1971 年には「Paris collections 71-72」と書かれ、長澤節により、ウンガロ、サンローラン、クレージュ、カルダン、シャネル、パトゥーのイラストが描かれ、解説されている。初期の『an・an』はパリ・モードを自分で製作することのなくなった女性たちに、パリ・モードを見せ、ハイセンスで人気を博す媒体となった。パリ・モードを再現する洋裁学校瓦解後の、大衆的な女性誌でパリ・モードが語られている、これには井上が述べていたように、「民主化」された洋装ファッションの受容を感じるとともに、その後の女性誌でパリジェンヌへの憧れが語られ続けるようになる嚆矢ともいえるだろう。このようにして、パリジェンヌのイメージは、女性の大衆的な話題となっていった。

日本人女性による「パリ幻想」形成に最も重要と思われる戦後から現代までの形成プロセスのなかでも、とくに 2000 年以降に刊行された書籍について調査したところ、刊行書籍のテーマが非常に細分化されていることがわかった。そして日本でのパリジェンヌ関連書籍の 9 割がパリジェンヌではなく日本人による著作であり、フランス人男性との結婚や、渡仏した有名人女性が「正統」な語り手として、日本のパリジェンヌ、パリ言説を作り出していることがわかった。また、パリジェンヌが日本を語る「正統性」を持ち、日本が再発見され、価値のあるものであることが確認されるという捻じれた関係ができていた。エイジングなど社会現象や流行によって、語られるパリジェンヌイメージが変化していることもわかった。近年、日本での「パリジェンヌイメージ」は日本人の語り手によって構築され、流行によって変化、消費されるという特徴を持っていることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 猪俣紀子	４．巻 17
２．論文標題 戦前・戦後のパリジェンヌイメージの変化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 人間学研究	６．最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 猪俣紀子	４．巻 18
２．論文標題 戦後の洋裁文化によるパリジェンヌイメージ形成	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人間学研究	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増田のぞみ・猪俣紀子	４．巻 55
２．論文標題 少女マンガ雑誌における「外国」イメージ―1960～1970年代の『週刊少女コミック』分析より	５．発行年 2019年
３．雑誌名 甲南女子大学研究紀要Ⅰ	６．最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 猪俣紀子	４．巻 16
２．論文標題 2000年以降の書籍からみる日本のパリジェンヌ幻想	５．発行年 2018年
３．雑誌名 人間学研究	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 猪俣紀子
２．発表標題 Parisienne image in Japan
３．学会等名 Japanese Studies Program
４．発表年 2019年

１．発表者名 猪俣紀子
２．発表標題 戦後の女性によるパリジェンヌイメージ形成
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 猪俣紀子
２．発表標題 パリを伝えた女性たちー朝吹登水子の伝えたパリ
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 猪俣紀子
２．発表標題 日本におけるパリジェンヌイメージ
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関